

# 主体的・対話的で深い学びの土台としての心理的安全性

— 中学校保健体育における授業実践を通じて —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 小暮 力也

## 1. 緒言

新学習指導要領では、子どもたちが予測困難な時代に対応していくため、「生きる力:生きて働く知識及び技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」の育成が求められている。これらの資質・能力を身に付けるための方法として、「主体的・対話的で深い学びの授業改善」の推進が求められている(文部科学省、2017)。

「生きる力」及び「主体的・対話的で深い学びの授業改善」の実現するためには、「心理的安全性:組織やチーム全体の成果に向けた素直な意見、素朴な質問、違和感の指摘が気兼ねなく言えること。(石井、2020)」と「リーダーシップ:状況・立場・文脈に応じて、取っている行動をより役立つように切り替えられるしなやかさ。他者に影響を与えられる能力。(石井、2020)」が必要である。

まず、「心理的安全性」が高い環境とは、集団やグループで活動する際に、生徒同士が①話しやすい(何を言っても大丈夫)、②助け合い(困った時はお互い様)、③挑戦(とりあえずやってみよう)、④新奇歓迎(異能・どんとこい)という環境が整備されていることである(石井、2020)。逆に、「心理的安全性」が低い環境とは、自分自身が①無知(必要なことを質問・相談をしない)、②無能(ミスの隠蔽・考えを言わない)、③邪魔(助けを求めない・仕事を妥協する)、④否定的(素直に議論せず意見を言わない)という環境にあることを指す(石井、2020)。

一方で、単純に「心理的安全性」が高い環境が整備されているだけでは、居心地が良いだけで仕事に対して充実感のない環境になってしまう。従って、「心理的安全性」の高い環境整備

に加えて、適切な基準(ハイ・スタンダード)を設定することで、チームが学習する環境になり、学習の促進や目標・課題の達成が期待できる(図1)。

実際に「心理的安全性」に関する先行研究として、亀山ら(2021)は、中学校理科の対話的な学びの実現に「心理的安全性」が重要な役割を果たしていることを報告していることや一色(2020)らが、教師と保護者の「心理的安全性」が高いことで、教師の新たな教育実践の挑戦に影響をしていると報告している。

学校教育の中でも「心理的安全性」への関心が徐々に高まっているが、保健体育の授業で「心理的安全性」が取り入れられている報告は未だない。また、保健体育の教科特性として、集団で行う競技や種目が教育課程に指定されており、グループで活動する機会がある。ならば、1人1人の生徒×生徒、生徒×教師の間で知識や技能の習熟度が視覚的に認知しやすいことから、「心理的安全性」の高い環境の整備がなければ、保健体育の授業展開が困難であると予想される。

そこで本研究では、「心理的安全性」の高い環境を保健体育の授業で保障することで、生徒が安心して授業に参加できるような授業を検討した。

		基準	
		高い	低い
心理的安全性	高い	<b>学習する職場</b> ・健全な衝突と高いパフォーマンス	<b>ぬるい職場</b> ・コンフォートゾーン →心地のいい場 ・仕事の充実感はない
	低い	<b>きつい職場</b> ・不安と罰によるコントロール	<b>さむい職場</b> ・余計なことをせず自分の身を守る

図1. 心理的安全性と仕事の基準

(石井、2020)

## 2. 方法

### (1) 実習概要

実習校：山梨県内公立中学校

実習期間：6月25日～12月24日

### (2) 対象者

対象者：中学校2年生

男子：13人 女子：13人 合計26人

### (3) 授業実践

単元：球技 ネット型「バレーボール」

単元指導：10月21日～11月10日

指導時数：9時間

### (4) 単元概要（中学校学習指導要領より）

#### ①単元の目標（第1学年及び第2学年）

ネット型競技とは、コート上でネットを挟んで相対し、身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである。

第1学年及び第2学年ではラリーを続けることを重視し、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。

空いた場所への攻撃を中心としたラリーの継続についての学習課題を追究しやすいように、プレイヤーの人数、コートの広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れ、ボールや用具の操作とボールを持たないときの動きに着目させ、学習に取り組ませることが大切である。

#### ②各評価規準（第1学年及び第2学年）

##### ・知識及び技能

次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開すること。

（イ）ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること。

##### ・思考力・判断力・表現力等

攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。

##### ・学びに向かう力、人間性等

球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、作戦などについて話し合いに参加しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする、仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ること。

### (5) 単元計画

#### ①単元計画に当たって

本単元では、中学校2年生が対象であるため、バレーボールの基本を押さえること及びラリーを続けることをねらいとしている。そのため、はじめからバレーボールのフルコートで授業を行うのではなく、バドミントンコートを使って練習やゲームを行ったり、各授業回で目標とする技能に関するゲームを取り入れたりして授業を展開していく。重ねて、本実習校では、基本的に生活班での活動が行われるため、実習校に即した班編成を行った。また、今回は準備が間に合わなかったが、可能であればバレーボールが当たる衝撃を和らげるためのソフトバレーボールの導入を考えた。

#### ②単元計画の概要

##### ・単元の全体計画（表1）

はじめ、なか、おわりで構成しており、それぞれの段階での内容について、以下に記載する。

##### ・はじめ（3回）

バレーボールの意義や歴史、学習規律や授業の流れ確認、研究における事前アンケート調査、ボール慣れの動きを行い、バレーボールに親しむ活動を中心に行い、基本的なボール操作である、オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーハンドサービスなどの技能に触れる。

表1. 単元計画

展開	学習内容
はじめ (3回)	(1)オリエンテーション ・バレーボールの意義や歴史 ・学習の仕方・規律の確認 ・事前アンケート調査 ・ボール慣れの動き (2)・(3)基本技能① ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ・アンダーハンドサービス ・ミニゲーム (パス・サービス)
なか (4回)	(4)研究授業 ・動画分析、グループ学習 →オーバーハンドパスの動作 アンダーハンドパスの動作 動作を撮影・分析・意見共有する ・ミニゲーム (パス) (5)・(6)基本技能② ・スパイク ・三段攻撃 (形作り) ・ミニゲーム (スパイク・三段攻撃) (7)空いている空間 ・図から空いている空間を探す →チーム (グループ) で話し合い ながら空いている空間をねらう ・ミニゲーム (空いている空間)
おわり (2回)	(8)リーグ戦 ・各班でのリーグ戦 (9)フルコートでのリーグ戦 ・事後アンケート ・振り返り、まとめカード

・なか (4回)

バレーボールの基本を押さえること及びラリーを続けることを目指すため、基本技能となる「オーバーハンドパス・アンダーハンドパス」の動作分析及びグループでの意見共有を行う。さらに、バレーボールの醍醐味である、三段攻撃やレシーブについても取り扱い、徐々に本来のバレーボールに近づけていく指導を行う。

・終わり (2回)

バドミントンコートでこれまで学習した内容を生かしてリーグ戦を行う。できる限り三段攻撃を使用して得点に結びつくようなゲームを目指し、リーグ戦を行った。また、第9回目 (最終回) では、バレーボールのフルコートでリーグ戦を行い、実際のバレーボールの難易度の高さやフルコートでの楽しさを感じさせるとともに、3年生で行うバレーボールの授業の見通しを持たせる授業を行った。

(6) 研究授業

①研究授業の概要

授業回：第4回

授業日：10月27日

②使用道具

バレーボール、バドミントンコート

マーカー、iPad、付箋、ワークシート など

③本時の学習目標・学習評価

・学習目標

「動画を分析してよりよいパスのフォームを身に付けよう」

・評価項目

✓技能 (②)

ボールを返す方向に面を向けて打つことができる。(ボールがつながるように味方が操作しやすいボールの強さや高さを考え打つこと。)

✓思考力・判断力・表現力等 (①)

提示された動きのポイントやつまづきの事例を参考に、仲間の課題や出来栄を伝えている。(ボール操作及び定位置に戻る動きに関するポイントを仲間に伝えること。)

・学習評価

(1)授業内での活動観察

技能 (動作)・グループ活動の様子

(2)学習カードへの記述

技能・次回への展望に関する記述

表2. 本時の展開

展開	学習内容
導入 (5分)	(1)準備運動・補強運動 (2)本時の目標 「動画を分析してよりよいパスのフォームを身に付けよう」
展開 (40分)	(3)授業の見通し →本時で行うことの説明 (4)基本練習 →各パスの確認 (5)班で動作分析及び意見共有 →役割の仕事を行う (6)ミニゲーム →本時で行ったことを意識したゲームを行う
終末 (5分)	(7)学習カードのまとめ (8)整理運動

④動画分析

○保健体育「バレーボール」資料(2021/10/27)

(1) 各班 1人1回アンダーハンドパス・オーバーハンドパスの撮影を行う

トス

パス

撮影者

パスを打つ人が打ちやすいトスを上げる! 投げることもOK.

パスをしている人が大きく映るように撮影する! 赤点線がイメージ.

オーバーハンドアンダーハンド各パスを1回ずつ行う!

・役割分担

①撮影される人(1人)	③撮影する人(1人)
②トスを上げる人(1人)	④補助・準備をする人(1・2人)

(2) 班 1人1人の動作を分析する

- ①仲間のオーバーハンドパス・アンダーハンドパスの動画を見る。
- ②〇よかった点△気になった点を付箋(ふせん)に書き、仲間に渡す。
- ③仲間からもらった〇よかった点△気になった点の付箋をワークシート1に貼る。
- ④自分の動画を見て感じたことと仲間に教えてもらったことを参考にワークシート2に書き出す。また、どんな練習・意識をしたら改善できそうか書き出す。

(3) 試合ゲーム

- ・今日改善したオーバーハンドパス・アンダーハンドパスを使うこと
- ・仲間が操作しやすいパスを意識すること

図2. 研究授業の流れ

(1)撮影の仕方

図2にあるように、班の中でそれぞれパスを行う生徒(撮影される生徒)、撮影を行う生徒、トスを上げる生徒、補助をする生徒に分け、役割をローテーションで行う。

(2)班 1人1人の分析について

仲間のパス動画を見る、良かった点・気になった点を付箋に書き、仲間に渡し、それぞれのワークシートに張り付ける。さらに、もらった付箋や自分自身で動画を見て、再度、良かった点・気になった点について学習カード(図3)に書き出す。

(3)試合(ミニゲーム)

本授業で分析したこと及び仲間からもらった改善策を意識して、ミニゲームに取り組む。

※心理的安全性を意識したポイント

1人1役を与えることで、課題や活動内容が明確となり、グループに貢献できることや活動への達成感を感じることができる。

⑤学習カードについて

保健体育学習カード「バレーボール」(2021/10/27)

2年3組 番号 氏名 \_\_\_\_\_

0. 分析の視点

確認動作	準備姿勢、落下地点への移動、オーバー・アンダーハンドパス
確認のポイント	姿勢、手・腕・足の動き、体の高さ、視線、(声)など

1. 仲間からもらった付箋(フセン)を貼り出そう!

〇よかった点	△気になった点

2. 自分で動画を見た感想と仲間の意見を聞いて感じたこと

〇よかった点	
△気になった点	
⇒改善策・方法	

3. 今回の授業に取り組んで分かったことや改善できたこと

図3. 学習カード

(1)分析の視点

昨年度の研究では、見る視点を提示しなかったため、動画分析が思うようにできなかった。そのため本年度の研究では、動画の分析をする際に、観察すべき視点を明確にパス動作の流れ

及び具体的な体の部位（手・腕・足）・姿勢・体の高さなどを学習カードに示し、生徒が分析に集中して取り組めるように配慮した。

(2)付箋を貼るエリア

仲間からもらった、良かった点・気になった点について張り出し、付箋を見ながら振り返りを行った（コロナウイルス感染症対策で対面での話し合いや同じワークシートの回し読み・書きができないため）。

(3)振り返り

仲間からもらった意見と生徒自身で振り返りを行って、どのようなところが良くて、どのようなところに改善が必要なのかを動画や仲間からもらった付箋を見て振り返りを行う。

(4)次回からの取り組みや感想

次回の授業でどういったことに挑戦したいのか、どんなことを修正したいかなど、今回の振り返りを通じて考えたことを記述する。重ねて、意見共有を行っての感想を記述する。

※心理的安全性を意識したポイント

(1)における視点の視覚化を行うことで、グループ全員が足並みをそろえて撮影及び分析ができること。(2)では、良かった点と気になった点の2つを上げさせたことや悪いところ・改善点などネガティブな表現ではないため、生徒間で意見を書きやすい課題にした。

⑥アンケート（図4）

アンケートは基本的に心理的安全性に関する項目を設定しており、自身の意見が主張できるような環境であったのか、心理的安全性を感じられた具体的な場面について調査を行っている。重ねて、回答に関しては、事前アンケートが第1回目の授業内、事後アンケートは第9回の授業内で回収を行っており、事前・事後共にクラス全員（26人）の回答を得ることができた。また、今回は報告書の関係上、事後アンケートのみ記載をしている。

保健体育科 巨球技「バレーボール」アンケート 年 組 名

本年度からお世話になっております。教育実習生の小暮力也です。現在、保健体育の授業について学び、研究しております。今回は、中学校2年生における球技「バレーボール」に関して調査したいと考えています。お答えいただいた情報は目的以外に使用することなく大学関係者・小暮以外には開示できないよう、厳重に保管いたします。回答によって不利益が生じることはありません。アンケートのご協力をお願いいたします。 山梨大学教職大学院 小暮力也

(1) あなたはバレーボールが得意・苦手ですか？当てはまるものを選んでください。

得意（好き） ・ どちらかといえば得意（好き） ・ どちらかといえば苦手（嫌い） ・ 苦手（嫌い）

(2) (1)で選択した得意・苦手だと感じる理由を記入してください。

例) サッカー 仲間と連携して得点を決めると楽しいから。ボールを受けるとき、痛いや苦手、...

(3) あなたは今回のバレーボールの授業の中でリーダーとしてグループをまとめる機会がありましたか？

つねにまとめている ・ よくまとめている ・ たまにまとめている ・ まったくない

(4) あなたは今回のバレーボールの授業の中でグループ活動をしている時に自分の意見を仲間に伝えることができましたか？

できる ・ どちらかといえばできる ・ どちらかといえばできない ・ まったくできない

(5) あなたが今回のバレーボールの授業の中でグループ活動を行っている時に、安心してグループ活動ができると感じる理由を以下の項目から選択してください。また、その他に理由が考えられる場合は、その他の項目に記入してください。（複数選択可能）数字に○を書きつけてください。

1. グループ全体が目標に向かって活動している	6. メリハリのあるグループであること
2. 信頼できるリーダーがグループにいること	7. 仲間で自分の意見や発言に反応してくれること
3. グループでの役割が決まっていること	8. 仲間で自分の意見や発言を受け止めてくれること
4. グループで感動や学びを共有できること	9. 失敗を認めずお互い助け合うことができること
5. 明るく元気で笑顔なグループであること	10. 同世代（同じ年齢）でのグループであること

11. その他

(6) (5)で選んだ項目で大切だと思うランキング（ベスト3）を選んで下さい。

1位 2位 3位

(7) 10. 同世代（同じ年齢）でのグループ活動が安心できるグループだと感じる理由を記入してください。

(8) あなたが今回のバレーボールの授業の中で、安心してグループ活動ができたと感じた場面や安心してグループ活動が解りにできていると感じていることについて具体的に記入してください。

例) バスの動画分析の時に良い点や気になったところを優しく山崎君やチームのみんなが教えてくれた。チームが明るく元気な雰囲気だから積極的に活動をすることができた。

図4. アンケート（事後）

⑦個人技能カード

藤田（2020）のふきだし法と体育実技の教科書（学研教育未来、2019）を参考に個人技能カード（図5）を作成した。オーバーハンドパス及びアンダーハンドパスは、バレーボールの基本技能であり、このボール操作ができるようになって、ラリーの回数が安定すると考え、今回2つのパスを取り上げることとした。

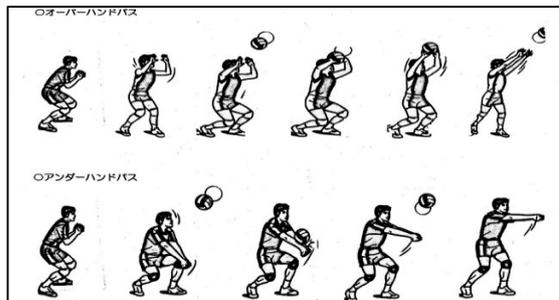


図5. 小暮が作成したふきだし法（学研教育未来、2019）

### 3. 結果及び考察

#### (1) アンケート結果

Q1. あなたは今回（これまでの）授業の中でグループ活動をしている時に自分の意見を仲間に伝えることができましたか？

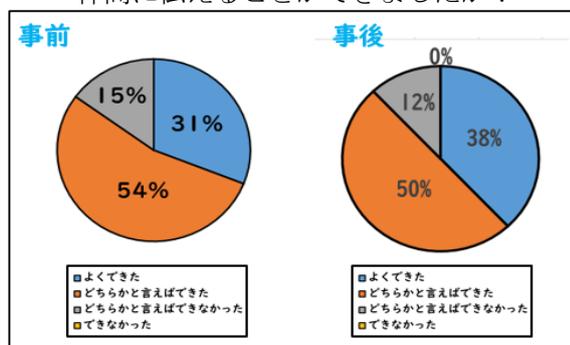


図6. Q1の回答結果

事前アンケートでは、85%の生徒が仲間に意見を伝えられると回答をしており、①の話しやすさ（石井、2020）という面で非常に高い数値が示された。事後アンケートでは、事前同様88%と高い数値を示し、大きな変動はなかったが、①話しやすい環境下での授業を展開することができたため、「心理的安全性」を保障できた授業ができたと思われられる。

Q2. 今回の授業で安心してグループ活動ができたと感じた場面があれば具体的に記述してください。

#### ①話しやすさ

- ☆コミュニケーションや声掛けができた
- ・ いいプレイの時の声掛け  
「ナイス！すごい！」、「おいしい…」、  
「ナイスファイト！！」など
- ・ 動画分析の話し合いの時に良い点・気になった点の共有をすることができた
- ・ アドバイスを送り合うことができた

#### ②助け合い

- ☆良い雰囲気や活動することができた
- ・ みんなが笑顔でプレイしていた
- ・ 失敗をしても前向きな姿勢や声掛け  
「大丈夫、大丈夫！」  
「どんまい、次があるよ！！」など

#### ③挑戦・④新奇歓迎

- ☆みんなで同じ目標に向かって頑張ることができた
- ・ 三段攻撃をするときに素早く行動した
- ・ 経験者の仲間からアドバイスもらった

#### ⑤リーダーシップ

- ☆リーダー（シップ）を発揮してくれる仲間がいた
- ・ リーダーに任せきりではなく、みんながフォロワーとして活動していた

今回の授業内で石井（2020）の定義する、①～④の項目に関する回答（内容によっては重複することもある）がされていたことやリーダーシップに関する回答が示されており、授業内で「心理的安全性」が保障できたと見受けられる。また、動画分析に関する回答も見受けられ、グループ活動の中で、仲間と意見を気兼ねなく交換できる環境があったことを示している。

#### ◎アンケート調査のまとめ

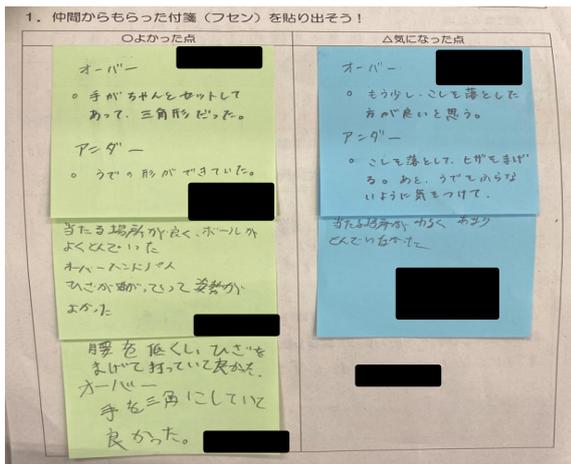
アンケート結果を通じて、「心理的安全性」が高く、「リーダーシップ」の発揮ができる環境づくりができていたと示されていた。今回の授業を通じて「心理的安全性」が保障できたと推察される。

#### (2) 学習カード・個人技能カード

##### ①生徒A：バレーボール未経験者

生徒Aの学習カード（図7）より、仲間との意見共有の付箋に、良かった点・気になった点それぞれ詳しく記入されており、付箋の内容や自身で動画の分析を行っての振り返りが記述されている。

特に学習カードの問3の記述には、「（仲間からアンダーハンドパスの際に腰を下げるようにと指摘を受けて改善をした。（フォームを）改善したことで、低めのボールが取りやすくなった」と記載されており、仲間の意見を素直に受け入れ、改善したことがパフォーマンスの向上へつながったと読み取れる。



2. 自分で動画を見た感想と仲間の意見を聞いて感じたこと

○よかった点	オーバーハンドパス 手の三角形がうまく作れていた。 ひざも曲げられた。	アンダーハンドパス 落下地下に入れた。 うでの位置がよかった。 打つ位置(首〜ひじ)が良かった。
△気になった点	オーバーハンドパス こしをおとすことができなかった。 ボールの軌道が直線的だった。	アンダーハンドパス 打つときに腕も固定できなかった。 ひざ、こしを低くできなかった。
⇒改善策・方法	オーバーハンドパス こしをおとして、フットボールを上げることを意識して取り組む。	アンダーハンドパス ボールも打つときに腕の「面」を意識して取り組む。 また、こしをおとし、なるべく低い姿勢で打つことを意識する。

3. 今回の授業に取り組んで分かったことや改善できたこと

オーバーハンドパスのときは、 手の指をのばして打つと、フットボールの軌道にボールを飛ばすことができる。上手な人を見ていて分かった。  
また、アンダーハンドパスのときは、こしを低くする方が良いと指摘を受けたので、意識して取り組んだ。かな/改善できた。さらに、こしをおとすことで、低めのボールもすく取りやすくなったと実感した。

図7. 生徒Aの第4回目学習カード

生徒Aの記述から成果に向けた違和感の指摘が気兼ねなくできる環境、つまり、「心理的安全性」の高い環境を実現できたと考えられる。

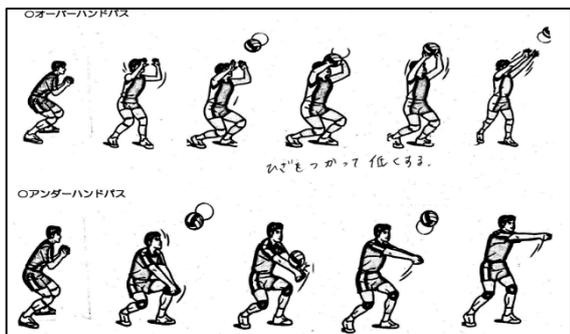


図8. 生徒A第1回 個人技能カード

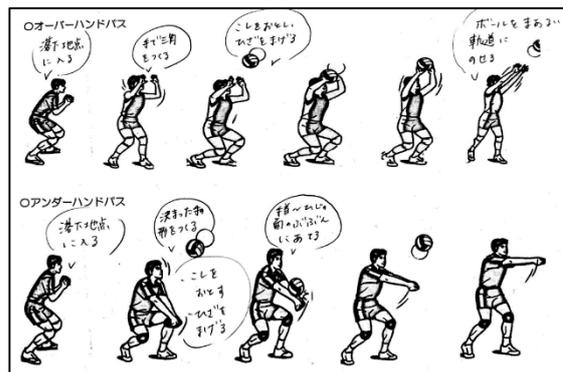


図9. 生徒A第8回 個人技能カード

生徒Aの個人技能カード(図8・9)では、第1回目のもは記述が無く、バレーボールに関する知識や技能がないことが見受けられる。しかし、第8回目ものを観察すると、単純な記述内容の増加に加えて、技能に関するポイントが記述されている。また、技能について言語化ができており、技能に関する理解が深まることで安心して授業に取り組むことができる要因になったと考えられる。

②生徒B: バレーボール経験者

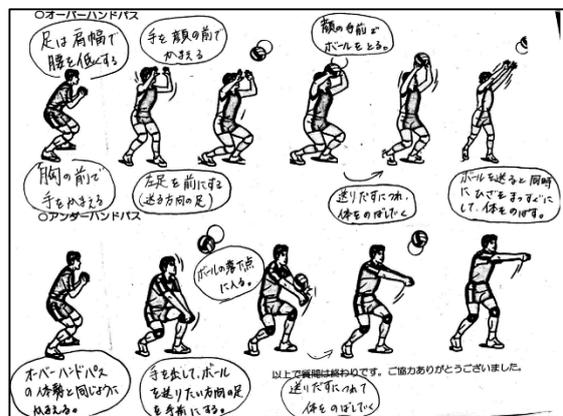


図10. 生徒B第1回 個人技能カード

生徒Bの個人技能カード(図10・11)では、第1回目ものから記述量が多いことや技能に関する記述が見受けられる。第8回目ものは、記述量が若干増加したことに加え、技能に関して言語化された表現がより使われるようになった。

生徒Bはグループのメンバーに限らず、困っている生徒に対してアドバイスを送っており、苦手意識を持つ生徒に具体的な言葉で説明できるという安心感があつたと考えられる。

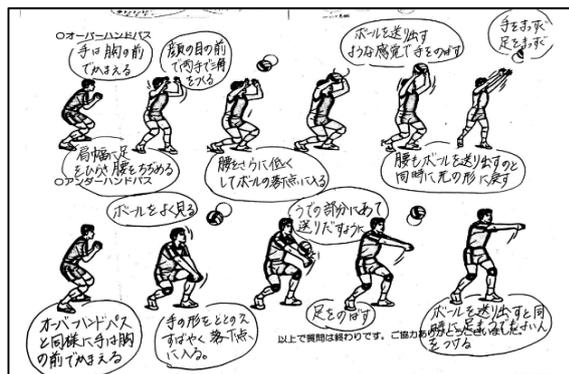


図1.1. 生徒B第8回 個人技能カード

生徒A・生徒Bの個人技能カードから、技能を言語化することによってそれぞれ、未経験者は何が分からないのか理解している安心感、経験者は技能を説明できるという安心感があるという環境があり、「心理的安全性」の確保に影響していたと考えられる。

#### IV. まとめ

本研究では、「心理的安全性」の高い環境を保健体育の授業で保障することで、生徒が安心して授業に参加できるような授業を検討した。

まず、アンケート調査では、石井(2020)の定義する「心理的安全性」の高い環境に関する項目及び「リーダーシップ」に関する回答が得られ、本授業内で「心理的安全性」を確保できたと示された。

次に、学習カード・個人技能カードでは、学習カードから、グループの意見共有で成果に向けた違和感の指摘が気兼ねなく言えている環境が確保されていたこと、個人技能カードから、知識及び技能の習得が授業参加への安心感を与える要因となり、「心理的安全性」の高い環境を確保できていたと示された。

以上の内容から、保健体育の授業における「心理的安全性」を保障した授業を実践することができた。

#### V. 成果と課題

##### (1) 成果

「心理的安全性」は保健体育において重要な役割を果たしており、「心理的安全性」が高く、生徒の実態に応じた課題や授業目標の設定が

不可欠であることが理解できた。また、授業を行う中で、実習校や生徒とのコミュニケーションを取ることができ、教師の「心理的安全性」も高かったように感じる。

##### (2) 課題

今回の研究を通じて、まだまだ自身の教材研究力及び授業実践力が未熟であることを痛感した。特に今回の実習校の先生方は授業内において、「心理的安全性」の高い環境を自然と作り出すとともに、生徒間で「心理的安全性」を確保できる指導を行っていた。

実践経験が乏しいからこそ、これから現場で少しずつ経験を積み上げ、生徒が「心理的安全性」の高く、楽しめる保健体育の授業を展開できるように、日々学び続けていきたい。

#### VI. 参考・引用文献

- ・中央教育審議会(2016) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)
- ・藤田範子(2019・2020・2021) 対話的な学びを深める保健体育指導—運動イメージの把握を促すアプローチ— 「わかる・かかわる・できる」が実感できる保健体育指導—運動欲求を喚起し、思考が活発化する学習の展開— 「スリーアップ」を取り入れた体育学習の導入に関する実践—「できる」・「わかる」・「かかわる」が実感できる授業を目指して— 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要
- ・学研教育未来(2019) 中学校体育実技2019
- ・石井遼介(2020) 心理的安全性のつくりかた 日本能率協会マネジメントセンター
- ・一色翼・藤桂(2020) 筑波大学心理学研究 小学校教師における創造的な教育実践に関する探究的検討—保護者に対する教師の心理的安全性との関係に着目して— 筑波大学心理学研究
- ・亀山晃和・原田勇希・草場実(2021) 学級内の社会的地位と実験グループに対する心理的安全性が理科授業における批判的議論とストレス対応に及ぼす影響 理科教育学研究
- ・文部科学省(2018) 中学校学習指導要領 保健体育編 東山書房

##### 謝辞

本年度も新型コロナウイルス感染症が流行し、実習生の受け入れが困難な中で実習の実施及び研究にご協力いただいた、連携協力校の生徒みなさん、校長先生、指導教官の先生方をはじめとするすべての先生方に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。